

グリーンツーリズム実施地域における集落景観に対する住民の選好性評価と 空間管理の関係に関する研究

A Study on the Relations between Preference Assessment of Residents and Spatial Management for Village Landscape in Green-Tourism Implementation Areas

○岡野 こゆう* 中島 正裕** 廣瀬 裕一***

Koyu OKANO Masahiro NAKAJIMA Yuichi HIROSE

1. 研究背景

グリーンツーリズム(以下 GT)の前提条件となる美しい集落景観の価値創造には集落活動(花植えや道普請等)や伝統的家屋の管理等の空間管理が寄与してきた。しかし、過疎・高齢化により空間管理の持続性に問題を抱えるようになった。こうした状況下で空間管理の持続性を問うアンケートを実施すると否定的な回答が予想される。それは自らが管理する対象物への価値認識が含まれずに単に労働・心理的負担からの評価となり、必ずしも住民の深層心理に従ったものではないと考えられる。

こうした問題意識から先行研究をみると、管理活動への態度は管理対象の選好性評価の影響を受けることが水車¹⁾や河川などの水利施設では指摘されている。これらの結果は、環境心理学の「評価グリッド法」により人間の認知プロセスに沿った選好性評価の構造から抽出したものであり、アンケートでは見落とされがちな深層心理から得られる。本研究では空間管理の持続性に影響を及ぼす要因分析のため、評価グリッド法を用いて集落景観に対する住民の選好性評価の構造を解明する。その結果に基づき、住民の深層心理から GT 実施地域の空間管理の価値認識を論じる。

2. 研究方法

2.1 研究対象地の概要

対象地は 80 年代から農村散策や工芸体験を中心に GT を展開してきた「たくみの里」(群馬県みなかみ町)の須川集落を選定した。旧三国街道宿場町の面影が残る美しい集落景観が高く評価されており、これらは花植え活動や道普請により維持されてきた。しかし、集落が実施した花植えに関するアンケート(2021 年度)によると住民の半数近くが「今後実施しなくても良い」と回答した。また、伝統的家屋(白壁の養蚕民家)等の空き家も 2017 年時から新たに 7 軒確認され計 12 軒(2022 年 4 月現在)となっている。

2.2 調査・分析方法

住民 16 名²⁾を対象に評価グリッド法を用いて集落景観に対する選好性評価のヒアリングを実施(2022 年 7 月 25 日~28 日)した。この調査で得た選好性評価の構造に人間の認知プロセスを考慮した心理的空間評価の階層モデル³⁾(小池モデル)を援用し、選好性評価の構造の階層性を整理し集落景観に対する選好性の決定要因を解明した。

3. 住民による集落景観の選好性評価の構造の解明

評価グリッド法を用いた手順⁴⁾により得た住民 16 人分の結果を統合し、全体の選好性評価の構造を得た。それを小池モデルに当てはめた結果を図 1 に示す。同モデルとは異なり外的環境階層の[社会的・文化的要因]と[物理的・幾何学的要因]は並列ではなく[物理的・幾何学的要因]←[社会的・文化的要因]という階層構造が明らかとなった。こ

*東京農工大学大学院農学府(Graduated School of Agriculture, TUAT), **東京農工大学大学院農学研究科(Institute of Agriculture, TUAT), ***農研機構農村工学研究部門(Institute for Rural Engineering)

キーワード: グリーンツーリズム, 農村景観, 評価グリッド法, 集落計画, 空間管理

それを踏まえ主な結果をみると、〔社会的・文化的要因〕では【集落活動】(花植え・道普請を行う等)が回答数 27 と最も多く〔物理的・幾何学的要因〕の【花】、【緑・自然】、【水路】などに強く影響(紐帯 5~6 本)を与えていた。また〔物理的・幾何学的要因〕の【建築物】は〔判断階層〕の【歴史】に非常に強く影響(紐帯計 8 本)を与えており、【歴史】は〔評価階層〕の【観光】へ影響を与えていた。〔評価階層〕では【癒し】が回答数計 21 と最も多く、【花】等の〔物理的・幾何学的要因〕や【地域性】等の〔判断階層〕から影響を受けていた。

以上の結果を踏まえて住民の選好性を規定する要因を階層的にみていくと、住民は集落景観に対して日常の癒し以外にも観光(GT)としての有用性を認識しており、それには地域性(旧宿場通りの雰囲気)や歴史性(伝統的家屋や水車等)の重要性、花や水路等の必要性を認識していた。さらに、これら一連の価値創造には家屋管理や集落活動が寄与している。また、これらの活動を支える要因として【連携】(集落内の連帯感が無いとこの先厳しい等)、【意識】(先人達からの積み重ね(水路管理や花植え)を大切に思うことが必要等)、【支援】(花植えの継続的支援、空き家管理への新たな支援)が重要である。

4. まとめ

本研究では住民の深層心理に着目し、評価グリッド法を用いて GT の中核価値である集落景観に対する住民の選好性評価の構造を解明することで、空間管理が GT 活動に寄与するということへの潜在的認識を把握した。その結果、住民の深層心理からは“好ましい”と感じる集落景観の維持に対して集落活動(花植えや道普請)の重要性が強く認識されていた。それに加え、集落景観の“好ましい”という判断には伝統的建築物や石碑等のモニュメントによって創造される歴史性、さらには花が観光的価値の認識に影響を及ぼしていた。以上より、アンケート調査等から空間管理の持続性を危ぶむ指摘がみられたが、深層心理では日常の住環境のみならず GT 活動においても集落活動の継続や家屋管理の価値認識は高いと考えられる。今後、こうした結果を地域住民と共有し、GT 活動と地域の空間管理の持続性を不可分な関係として捉え一体的に検討する取り組みが必要となる。

注釈・参考文献

- 1) 廣瀬裕ら (2013) : 非農業者住民の揚水水車に対する選好性評価の決定要因が保存活動への参加動機に及ぼす影響, 農村計画学会誌 32 巻論文特集号 p287-292
- 2) 男性 11 名:80 代 2 名, 70 代 4 名, 60 代 3 名, 40 代 1 名, 30 代 1 名, 女性 5 名:70 代 3 名, 60 代 2 名
- 3) 小池俊雄 (1988) : 都市河川空間の評価構造に関する研究, 土木計画学研究論文集 6 巻 p105-112
- 4) 本研究での手順としては、1. 評価対象となる写真を提示、2. 被験者による写真の分類、3. 被験者が自発的に発する評価の抽出、4. ラダーアップによる上位概念の導出、5. ラダーダウンによる下位概念の導出を行う。なお、3. 4. 5. で得られた回答をそれぞれ「評価項目」「感覚的要因」「必要条件」と定義した。

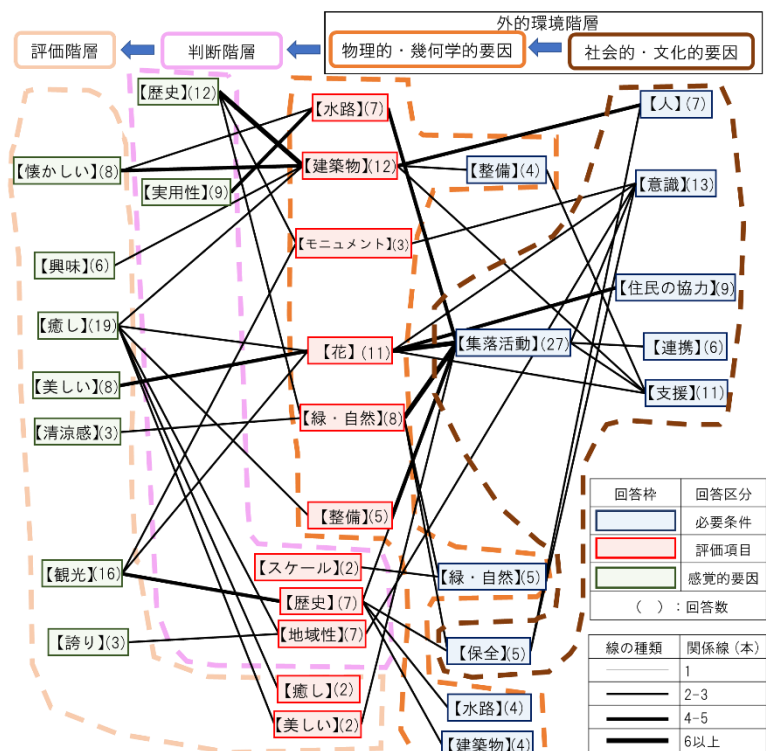


図1 須川集落の集落景観に対する選好性評価の構造
Fig.1 The Structure of Preference Assessment for the village landscape of the Sukawa settlement